

豚熱発生後の対応経過 (農地整備課との連携)

■背景とねらい

高森町のHさんは、豚熱の発生により養豚からきゅうりを主体とした経営に転換し、本年度から本格生産に取り組んでいる。

きゅうりほ場として水田2ほ場を借り受けたが、慢性的な排水不良により降雨時には管理作業が困難となり、作柄も不安定となっている。

そこでほ場の滞水とハウス内への流入防止に向けた排水対策を講ずるため、南信州地域振興局農地整備課と連携し、支援を行った。

■本年度の取組と成果

1 技術指導

養豚からきゅうりに切り替えた初年目の売上は、技術指導等により目標対比97であった。

2 排水対策

農地整備課から表面排水に関するアドバイスに基づいて、農家が排水溝や明きよの設置による排水対策を実施した。



排水対策を講ずる前の滞水の様子



排水対策を講じた後の様子

■今後の課題と対応

今回実施した排水対策が実際栽培において収量品質の向上につながるよう同課との連携の下、支援を継続していく。(技術経営係: 檜山 岳彦)

竹林整備で発生した竹チップの活用を検討(大鹿村) (林務課との連携)

■背景とねらい

管内で課題となっている放置竹林の整備において、伐採した竹の活用方法のひとつとして、令和元年度からチップ化した竹をブルーベリー栽培における有機物マルチの資材としての活用が可能か検討を進めている。

竹チップの活用を進めることで、荒廃竹林が減少し景観の改善に繋がることを期待する。

■本年度の取組と成果

1 実証ほの設置

(1) 調査の概要

大鹿村鹿塩地区のブルーベリー園に、令和元年9月に実証ほを設置。竹チップマルチと流木チップマルチ(小渋ダム、針葉樹・広葉樹混合)及び無処理区について、地温、マルチ内水分・土壌水分、土壌化学性等について調査を行った。

(2) 結果及び考察

竹チップマルチと流木チップマルチでは、無処理区に比べて地温や水分の変動が小さく抑えられ根域の環境保持に流木チップとの効果が見られた。

一年後のマルチ厚は、竹チップ区の方が流木チップ区より減少が少なかった。

以上のことから、竹チップはブルーベリー園のマルチ資材として使用が可能と思われた。

表 10月3日～14日の温度推移の比較(単位:℃)

		最高温度	最低温度	温度差
8cm深地温	竹チップ区	20.3	16.1	4.2
	流木チップ区	20.8	16.5	4.3
	無処理区	20.3	14.7	5.6
気温(地上2m)		25.8	6.7	17.2

■今後の課題と対応

今回は、2年間の調査であり、長期間にわたってマルチ資材が分解する過程で、土壤にどのような化学的影響があるかは確認できていないため今後も状況の変化を確認する。

(地域第一係: 木下 倫信)